

九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中村哲著述アーカイブ
Nakamura Tetsu Digital Archive

空爆と「復興」：アフガン最前線報告

中村，哲、ペシャワール会 編著

アフガニスタンからの発言 中村哲
(3/4、2003年)

<http://hdl.handle.net/2324/4772331>

出版情報：空爆と「復興」：アフガン最前線報告，pp. 72-99，2004-05．石風社
バージョン：初版 2004-05-31
権利関係：©Tetsu Nakamura & Peshawar-kai Printed in Japan 2004
石風社より許諾を得て本文を公開しています。
公開しているPDFの印刷、複製および許可のない二次利用はおやめください。



KYUSHU UNIVERSITY

水利事業への挑戦

アフガニスタン東部、特にニングラハル州では今年も旱魃^{かんぱつ}の収まる気配がない。絶対的な降雪量の減少に加え、巨大な貯水槽の役割を果たしてきた高山の雪が、温暖化で速やかに解け下り、保水力が著しく低下して旱魃被害を大きなものになっている。地下水位の減少も依然として続き、かなりの地域が砂漠化しつつある。

この傾向は海拔四千メートル級以下の山の麓^{ふもと}で著しい。ニングラハル州は北にケシュマンド山脈、南にスピンガル山脈で挟まれた領域で、両山脈とも、四千数百メートル以下である。対照的に、ニングラハル州北部に隣接するクナール州では、六千、七千メートル級のヒンズークツシュ山脈最高峰の雪解け水がクナール河を豊富に潤し、旱魃は生じていない。

PMSでは北部のグラエ・ヌール渓谷で、カレーズの再生と灌漑井戸の対策を施し、約二万名の住民の生存を可能にしてきたが、将来を考えれば、これにも限界がある。唯一の対策は、

1 豊富なクナール河水系の利用

2 春から夏に急速に流れ下る小河川の水の蓄積

これ以外に生き残る方策は考えられない。この事情を考慮し、今後ニングラハル州で以下の対策を実施する。

①クナール河（ヒンズークツシュ最高峰の雪に依存）右岸に用水路建設

②同左岸に用水路建設

③グラエ・ヌール（ケシュマンド山系の雪に依存）中流域に井堰^{いげ}、堤の建設

④ソルフロッド河（スピンガル山系の雪に依存）流域の井堰、溜池、堤

⑤グラエ・ヌール地下水路（カレーズ）の補強

⑥灌漑井戸による地下水の利用

今後、上記の対策を講ずる事で、少なくともアフガン東部数十万人の難民化を防止、または呼び戻す事が可能である。他に誰もやらなければ、手をつけるものから早急に実施すべきである。計画⑥（灌漑井戸）は成功裏に進行中。計画①（クナール河右岸水路）、計画③（グラエ・ヌール井堰）は、一五年計画の第一弾として直ちに実施し、砂漠化した耕作地を緑化、難民化した農民を呼び戻すと共に、新たな開墾や牧草地を期待できる。これによって推定一〇万人前後の難民

帰還と自給自足を目指している。ペシヤワール会で過去最大の挑戦だと言える。

(2003・4)

アジアの片隅で平和を拓く^{ひら}

マグサイサイ賞受賞に寄せて

このたび、「マグサイサイ賞・平和と国際理解部門」で表彰が決定しましたことに對して、過分な評価に恐縮すると共に、アジアの同胞からの熱い評価として、感銘を受けます。

この表彰は、決して私一人の業績ではなく、身命を惜しまず任務を尽くした現地PMS（ペシャワール会医療サービス）三〇〇名の職員、そしてこれを二〇年間、物心両面で支えてきたペシャワール会事務局員、一万二千名の会員たちに与えられた榮譽であります。

PMSはハンセン病診療に始まり、アフガン山村部の無医地区診療モデルの確立を目指し、二〇〇〇年夏以降、アフガニスタンを襲った未曾有の大旱魃^{かんぱつ}に際しては、餓死線上の者が百万人という中、飲料水源の確保を行い、現在その数は一十カ所を超えました。また、米国によるアフガ

ン報復爆撃に際しては、「いのちの基金」を呼びかけ、空爆下、餓死に直面する約二〇万人分の食糧を大量輸送しました。現在、平和な農村の回復を目指し、沙漠化した農地を緑化すべく、用水路などの灌漑事業に力を注いでいます。

その後のめまぐるしい政治的变化と移ろう国際的関心をよそに、私たちの現地事業は何事もなかったかのように続けられています。早魔は収まる気配がなく、アフガニスタンは混乱を残して再び忘れ去られようとしています。しかし、私たちは今後も変わらずに人々と苦楽を分かち合い、一人の証言者として事実を訴え続けたいと思います。

戦乱のアフガニスタンとペシャワールでの二〇年の活動は、国境や宗教を超え、政治的立場を超え、実に多くの人々の協力によって行われました。それは必ずしも容易な道のりではありませんでした。時には、大きな忍耐が必要でした。

現地職員の国籍や民族、宗教もさまざまです。宗教的対立、国家の壁、多数派民族と他の民族との対立、部族対立、農村と都市の矛盾、急激な近代化と伝統社会との軋轢、^{あつれき}拡大する貧富の差、そして「近代的な先進国」と自負する日本・欧米諸国と途上国との矛盾——凡そ全てのアジア世界の対立と苦悩の構図を、私たち自身が引きずってきました。

この中で、異なる人々の互いに協力し合えたのは、おそらく私たちが「いのち」を尊び、人として的一致点を探る努力を怠らなかつたからでありましょう。私たちのささやかな確信と結論は、多様なアジア世界にあって、相互の相違を認め合いながら、人として共有できるものがあるとい

う事実です。

昨今、日本で見られるように、国家的暴力行使が平然と是認される国際社会の風潮の中で、弱い立場のアジアの同胞は言葉を奪われ、心ある者は沈黙を余儀なくされております。自らのアイデンティティを喪失し、人としての誇りと平和な生活を奪われることは耐え難いものがあります。しかし、暴力によって立つ者が暴力によって倒されるのもまた、人類史の鉄則であります。

アジアの片隅で行われた私たちの小さな努力が、いかなる既成の立場も先入観も超え、共生と融和の新しい時代の流れを切り開く、一つの捨石となることを祈ります。

(2003・7・29)

アフガン復興の帰結

アフガニスタンの復興や現状を語るときに大切なのは、いかなる視点で何を見たかである。現場で一連の経過を見てきた私たちには、米国の「対テロ戦争」以後、いわゆる国際世論が何かに憑かれたように急変し、現状の伝達がある種のフィルターで選択されているという印象をぬぐい切れない。

また、伝える側の取材の範囲と対象に制約もある。アフガニスタンの大半は「地方」である。東部農村地帯に根を張る私たちから見ると、外国人が比較的自由に出入りできる首都カーブルは、アフガニスタンでは特殊地域だ。その上、限られた知識層・富裕層との接触になりがちである。加えて、複雑な民族分布と地域差、言葉の壁、一般人が外国人に本音を語れない事情、流動的な

情勢などもあって、短期の観察ではどうしても全体像がつかみにくい。

その好例が、一時盛んに取りざたされた女性のかぶり物（ブルカ）である。これはパキスタン北西辺境州からアフガニスタン全土にかけて着用されてきた伝統的な女性の外出着で、さしずめ日本の和服に相当する。これが女性差別の象徴として、「悪のタリバン」というイメージを作り上げ、「アフガン解放」という名の戦争を正当化する一助となった。

確かに首都カーブルのごく限られた上流層の間で、西欧的な「自由な空間」がかつて存在した。それが崩れたのは、九二年四月に旧ナジブラ共産政権が倒れた直後である。首都になだれ込んだ党派（旧七派暫定政権）の間で激しい内部抗争が繰り返され、略奪や婦女暴行が横行した。わずか三年間で、市街戦によって首都の三分の二が破壊され、二万人の市民が死亡したといわれる。九六年九月、モラルの点で潔癖なタリバン勢力が首都を陥落させ、無秩序状態を收拾したとき、「ブルカ着用令」は治安回復の意味を持っていた。路上を素顔で歩くこと自体が女性にとって危険だったからである。

その後「タリバンによる人権侵害」として非難の対象となった公開処刑、売春や婦女暴行に対する厳しい罰則、日に五回の礼拝の義務づけなどは、実はアフガン農村社会の日常だった。それまで首都の限られた空間だけにとどまっていた外国人たちは、初めて見る厳しい掟に驚き、「野蛮な中世的統治」との一方的理解を抱いて、いっせいにアフガニスタンから退去した。これに対して、地方農民や下層の都市民たちは、当面の生命の危険が遠のいたことをむしろ歓迎したが、

その声は世界に伝わらなかった。実際、現在の「解放されたカーブル」ですら、素顔で歩く若い女性を見つけることは困難である（若い少女や老人はブルカをかぶらないことが多い）。

こうした事実を、「アフガン復興」を語る際には知っておくべきだ。何をもって復興とするのか、空爆と外国軍進駐によって何が破壊されたのか。大多数のものの言わぬ人々の動向を知ることなしに、現状は語り得ない。私たちが伝えうるものが、主にアフガン東部の限られた地方の実情であることも確かだ。しかし、表層の政治現象だけでは見えぬ水面下のうねりを、多少なりとも伝えることができるだろう。

国際社会の甘すぎた認識

二〇〇一年九月一日、同時多発テロが発生した直後から、「対テロ戦争・アフガン報復爆撃」という図式がいつの間にか定着し、先進諸国の大部分がこれを支持した。「湾岸トラウマ」を抱え、憲法改正を企図する日本の政治指導者たちもまた、「難民支援の一環」と称してこれに便乗、参戦を既成事実とした。

こうして平和的な意見や冷静な現状認識は軽々と無視され、中立的な発言さえ「偏った一部の見方」とされて、実体のない「国際世論」が説得力を持ったことを忘れてはならない。同年一月、アフガン空爆が強行され、その結果、アフガニスタンの国土の九割を実効支配していたタリバン政権が一月には崩壊、米英に擁立されたカルザイ新政権が発足した。世界のメディアが

「アフガン解放」の映像を伝え、翌〇二年一月には、「アフガン復興支援・東京会議」で日本中が沸いた。

東京会議の後、あるアフガン政府官僚は「突然月世界からやってきたような連中に、実情を無視して何ができる」と怒りをぶちまけた。東京会議の意向を受けて、教育・女性問題などに援助が集中したが、現実にはそれより先に取り組むべき切迫した問題があった。二〇〇〇年夏以来の激しい旱魃^{かばう}で、多くのアフガン人が生存の危機に直面していたのである。にもかかわらず、報道されたのは、首都の一部の限られた動きだけだった。それが世界中に明るい復興ムードを演出し、次第にアフガン報道は紙面から消えていった。私たちが訴え続けてきた大旱魃の惨状が真剣に伝えられることはなかった。

大部分の農村地帯や都市貧困層にとっては、タリバン政権出現以前、すなわち九二年の共産政権崩壊後の無秩序状態が再来したに過ぎなかった。新政権は山のような難題を抱えて発足した。かろうじて首都カブールにはISAF（国際治安支援部隊）二千人が進駐したものの、軍閥が各地に割拠、アフガン政府の威光はカブールに限定されているのが実情である。米軍は終始、安全な上空にとどまり、危険な地上戦を各地域の「反タリバン軍閥」に請け負わせた。このため、大量の武器と資金が各軍閥に流され、大混乱を現出した。

事実、カルザイ現大統領は米軍特殊部隊に守られ、〇二年秋から米軍が民政に関与、一般民衆はまともな「アフガン政権」が誕生したとは信じていない。全体の状況を眺めると、米軍はカル

ザイ政権を擁立しながら、他方で国家統一を阻む地方軍閥を支えるという奇怪な構図になっている。○二年九月、カンダハル訪問中に暗殺未遂が起きて以後、カルザイ大統領は地方に一步も出たことがない。

いまや国連職員をはじめ誰もが、タリバン統治時代の治安の良さをひそかに懐かしみ始めている。盛大に復活したケシ栽培が象徴的である。大飢饉にもかかわらず、厳格な旧タリバン政権下ではケシ栽培は絶滅に追い込まれていたのに、わずか一年間でアフガニスタンは、不名誉な「世界最大の麻薬供給国」にのし上がってしまった。

一つの秩序が崩壊した後にいったい何が起きるのか、どうやってそれを收拾するのかについて、国際社会の認識があまりに楽観的だったと言わざるを得ない。少なくともアフガニスタンにおいては、「圧政からの解放」とは、いかなる意味でもドイツのナチス政権やカンボジアのポル・ポト政権からの解放にたとえるものではなかった。アフガン復興とは、自ら破壊したものの後始末でしかない。

泥沼化する軍事行動

行政機構の整備も遅々として進まず、実情を知る政府官僚は危機を感じている。約束された援助の大半は国連やNGO（非政府組織）を通して行われたから、政府が実際に受け取った額は三〇パーセント前後にとどまり、月給数十ドルの役人の給与さえともに支払われない。対照的に、

国連や外国の支援団体はその数倍もの高給で人材を雇用し、しかも復興支援がしばしば実情とかけ離れた外国人のアイデアで行われ、彼らの存在が新政府にとって大きな壁となって立ちはだかっている。

○二年一〇月、アフガン政府は七万人の国軍創設を発表、兵士の訓練を始めたものの、その月給は三〇ドルで、米軍に直接雇用される傭兵にはるかに及ばない（○一年一二月に行われたトラボーラの作戦では、多いときには日給二〇〇ドルが傭兵に支払われた）。しかも、最も危険にさらされるのは国軍兵士である。○三年三月にイラク攻撃が始まると、米軍や国際治安支援部隊への攻撃が倍増し、ドイツ兵四人が白昼の自爆テロで死亡した。だが、アフガン兵のこの程度の犠牲は日常茶飯事であり、ほとんど報道されない。かくてアフガン合同軍兵士の離反が報ぜられ、カーブルの治安さえ危ぶまれている。

すでに○二年秋の段階で、NGOの一部や国連筋が国際治安支援部隊の地方展開を要請したが、当時その総指揮をとっていたトルコ軍のゾルル少将は「不可能だ」ときっぱり否定した。代わって米英の音頭で登場したのが「NATO軍派遣」である。それによると、「NATO加盟国を一九から二六ヶ国に増やして機動部隊を創設。テロリスト存在の疑いがあれば、いつでもどこでも緊急出動し、当事国の了承なしに攻撃する。指揮は米軍高官がとる」（○二年一月一六日付ガーディアン紙）という、国家の主権を否定する驚くべき内容だった。だが、これもさしたる物議をかもすことなく、○三年八月からNATO軍のカーブル進駐が予定されている。

一方、イラク開戦の後でさえ月間一億ドル以上の戦費を費やしているにもかかわらず、米軍の「タリバン／アルカイダ掃討」は決して進んだとは言えない。東部・南部での米軍や外国団体への襲撃は今や日常化し、さらに激化の兆しを見せている。

アフガン空爆の前後から、パキスタン政府は英米の圧力でアフガン政策を一八〇度転換した。ザイーフ旧タリバン政権大使の逮捕、マドラサ（イスラムの伝統的寺子屋）の統制、親タリバンの閣僚の罷免、ISI（軍統合情報部）の人事更迭、地元宗教指導者の弾圧などを矢継ぎ早に実施した。これは多くのパキスタン国民の間に懷疑と反発を生み出し、特にアフガン東部に隣接する北西辺境州とバルチスタン州の住民は、「アルカイダ狩り」の名で行われた米軍の露骨な進駐と軍事活動に猛反発している。この結果、〇二年一〇月に行われた総選挙では、イスラム主義政党が大躍進し、大統領支持政党は過半数を割り、彼らの声を無視できなくなった。さらにパキスタン自身が、現在分裂の危機を孕んでいる。北西辺境州（人口一千万）では、〇二年一月、住民の圧倒的支持で親タリバン原理主義の州政府が誕生した。「わが国はアメリカの傀儡か」と州高官自らが公然と米軍の活動を非難し、隣接のアフガン東部（クナール州、ニングラハル州、パクティア州、ローガル州）で確実に不穏な情勢を生み出している。

これに同地域を根拠地として、ヒクマティヤル元アフガン暫定政権首相がタリバン勢力との共闘を宣言、聖戦を呼びかけ、事態をいっそう複雑にしている。パキスタン国境にタリバン指導層が潜伏していると見た米軍は、パキスタン・アフガニスタン両政府軍を使って挟み撃ち作戦を展

開し、パキスタン側の「部族自治区」に兵を進めた。しかし、同地域はかつての英国支配時代に最も頑強な反英闘争が繰り広げられたところであり、いよいよ泥沼に引き込まれたと思われる。たとえば、タリバンを追撃してきた米軍がパキスタン側に入ったところ、友軍と思われた武装勢力に発砲されて戦闘状態となり、その報復で米軍がモスクや学校を「誤爆」して多数の村民が死傷、一挙に住民を敵に回した（〇二年十一月）。逆に、パキスタン国軍が米軍に協力して自治区の武装解除に乗り出し、武装勢力を追って国境を越え、アフガン東部の武装勢力と衝突する事件も起きている（〇三年七月）。

だが、もっと底辺の人々から見れば、政治的な動きはさほど決定的なものではない。根底的にアフガン社会を律するのは、地縁と血縁である。地縁はジルガ（長老会）に代表され、血縁は地域を超えて家族や部族の動向を律する。アフガン東部は二四〇〇キロに及ぶ長大な国境でパキスタン西側地域と接している。二千万人のパシュトゥン諸部族は国境を越えて、血縁関係でつながっている。長大な国境の監視など不可能であり、複雑に入り組んだ部族間の敵対・協力関係は読み取れない。その上、米軍の強引な「搜索方法」は多数の農民を巻き添えにし、相当な反感を買っている。表向き穏やかでも、一般の住民感情は敵意と軽蔑に満ちている。今後、米軍とその同盟軍は政治的意図とは無関係に、報復の掟に長くさらされることになると思われる。ペシャワール、ジャラバード、カブルなど至るところに「血縁のネットワーク」があり、政治的立場を超えて強力な絆が水面下に存在する。その絆はタリバン協力者から米軍協力者まで、一農民

から政府高官に至るまで及んでおり、敵味方の識別など不可能である。

Uターンする難民たち

アフガン復興の最も雄弁な指標は、難民の動向である。○二年一月に在パキスタンのアフガン難民は二〇〇万人と発表され、○二年三月から一二月までに一七〇万人が帰還したと報告された。だが今年三月に再開された帰還計画では「一八〇万人を三年間で帰還させる」とされている。すなわち、多くの難民がUターンしてパキスタンへ戻ったのである。国民の九割を占める農民や遊牧民にとって、難民化の本当の理由は、二〇〇〇年に本格化した大旱魃であった。WHO（世界保健機関）が早くから「四〇〇万人が飢餓線上にある」と警告し続けてきたにもかかわらず、「復興支援」で大きな課題として取り上げられなかったのは、奇怪だといわねばならない。UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の現場の担当者自身が「（今回の帰還計画が）無理なことではわかっています。パキスタン政府や国際社会の威光の妥協の産物ですが、それでも何もしないよりは……」と率直に語っている。

いずれにしても、○二年一月の「復興支援・東京会議」で難民が過剰な期待を持ったのは事実で、衣食住が保証されるという噂を信じて帰還した者が多かった。帰還に際して一人当たり一〇ドルが支払われたが、それだけではとても生活できるものではない。ほとんど砂漠化した村で途方に暮れ、主要都市で職にありつけない者は、再び間道を通じてパキスタンやイランへの道をた

だった。「人と活気であふれ始めたカーブル」という報道は、飢餓地獄でうごめく無数の人々がいたことを伝えなかった。だが彼らの困窮が長引けば、東京会議の共同議長国である日本の国際的信用の失墜につながりかねない。

対日感情の変化については、残念ながら明らかに悪化の兆しがある。今年三月の「イラク攻撃反対」デモでは、日章旗が英米の国旗と並んで焼き捨てられた。このようなことは、親日感情の強いアフガニスタンでは以前は考えられなかった。強い危機感を抱いている。

外国からの支援は、話題性がなくなると去ってしまうことを、アフガンの人々は過去の経験から骨身にしみて知っている。実際かなりのNGOがイラクに移ったり、大幅な規模縮小を行っている。それでも、農業、畜産、給水、灌漑などのプロジェクトに携わり続けている人たちの中では、未曾有の早魃に危機感を持つ者がしだいに増えている。また、国際人権委員会は、タリバン兵捕虜二千人の虐殺事件、劣化ウラン弾、クラスター爆弾の犠牲者などの調査に乗り出し、少しずつ「対テロ戦争」の実態を明らかにしようとしている。

アフガニスタンの行方と日本

アフガニスタンは山の国である。世界の屋根の一翼、険しいヒンズークッシュ山脈が国土の大部分を占め、互いに隔絶した諸溪谷がひしめき合う。この地理的条件が人々の共同体のあり方を規定してきた。自給自足の農村生活が独立不羈^{ふき}の気風を育み、幾多の民族移動や征服の荒波に洗

われ、時に内部抗争を繰り返しながらも、外来者を寄せ付けなかった。彼らのテコでも動かぬ保守性が、「アフガニスタン」という固有の宇宙を守ってきたのである。

ある米軍士官は「タリバン兵は、昼間は普通の農民の顔をしており、夜になると凶暴な攻撃者になる」と述べているが、これは慧眼である。もともと「タリバン」に代表された宗教主義は、必ずしもアルカイダなどの国際原理主義運動とは直結しない。むしろ「アフガン国粋主義」とも言うべきもので、アフガン農村、特にパシュトゥン人共同体を律する掟の真髄を表すものだったからである。政治勢力としてのタリバンが消滅しても、タリバンを生み出した土壌は変わらないだろう。人々は旧ソ連軍が侵攻した時と同じように、ちんにゆう闖入者に対しては戦い、利を得れば和して耕すだろう。

いずれにしても、外国による「正義」の押しつけや性急な近代化は、事態をこじらせ、いたずらに憎悪を増すだけである。これは亡霊同士の終わりのなき戦いだ。タリバンの亡霊に挑戦する「国際社会」にもまた実体がないからである。

国境の混乱は既述したが、アフガン東部・南部では米兵が安全に地上を移動できなくなっている。危ない地上戦闘は地元軍閥に下請けさせるので、米軍自身が中央に帰属しない軍閥の存続を助けていることになる。つまり、米軍がいる限り、カルザイ政権は国家統一ができない。しかし、米軍が去れば即座に崩壊するという矛盾の中で延命している。○三年四月、ラムズフェルド米国防長官は、「公約された総選挙を実施、その後に撤退」と声明した。しかし、実際の軍事作戦領

域は拡大、六月になって「国際治安支援部隊の地方展開」が主張され、NATO軍が前面に出ようとしている。

一般の民衆は生きることに関心があるが、少なくとも東部では、米軍の存在を快く思う者はほとんどいない。アフガンでもパキスタンでも、「圧倒的多数の反米的な民衆と、一握りの親米的政権」という図式が定着した。襲撃は米軍や同盟軍だけでなく、外国のNGO、国際赤十字、国連組織にも向けられ始めている。○三年三月には国連職員が死亡、四月にはユニセフのジャラバード事務所が爆破された。だが、これを一部過激勢力の行為だと見ることはできない。その背景には、遅々として進まぬ復興、貧困層のいつそうの困窮で、『支援』でアフガン人が食いのにされている」という認識が行き渡っているからである。多くの外国人職員は米軍と同様、現場にあまり出ず、プロジェクトを地元の請負業者に任せることが多い。紙上の報告とは異なる複雑な事業が行われていることを地元民は知っている。

長期的には「米軍はいずれ旧ソ連と同じ道をたどる」と人々は信じている。米英が「アフガンを成功例に」イラク戦火を拡大し、「日本占領をモデルに」復興を図るなら、「アフガニスタン」は日本の未来とも密接に関連していることになる。世界が狭くなり、経済のグローバル化が進む中で、時代の奔流はすべてを押し流しているように思える。だが、ヒンズークッシュ山脈の巨大な山塊は、まるで濁流に動ぜぬ岩盤のごとく、より大きな視点をわれわれに提供してくれる。

表層の政治的動きとは無関係に、アフガンの人々の関心が「いかに耕し、いかに生き延びる

か」という、平和な農村共同体の回復にあることは、いくら強調しても足りない。そして、小手先の政治改革や目先の教育・経済投資ではアフガニスタンを救えないことは確かである。政治・軍事介入に至っては論外だ。本当に彼らが欲するものを探り、人間としての一致点において、見返りを求めず、彼らが生きるための協力を惜しまぬことである。そうしてこそ「アフガニスタン」は、私たち日本人にとっても、次世代の共生について、豊かな知恵を約束してくれるだろう。

(2003・9)

恩讐を超えて

気温が五〇度に迫る炎天下、二〇〇人の村民、PMS（ペシヤワール会医療サービス）の職員、若い日本人ワーカーたちが真っ黒になって汗を流す。シャベル、ツルハシを振るって溝を掘り、ブルドーザーがうなりを上げて土石をかき除ける。遠くでは轟音と共に岩石塊が爆破される。熱風と砂塵がしばしば作業を中断させる。

五月上旬、やっと灌漑用水路計画が本格化した。行く手に広がる漠々たる荒野が、かつて豊かな田園だったことを信ずる外国人は少ないであろう。国民の九割を占める農民たちにとって、最も深刻なのが旱魃^{かんばつ}である。四年目に入っても収まる気配なく、アフガニスタン東部では依然として各地で砂漠化が進行している。

三年前からペシャワール会は東部のニングラハル州全域で、飲料水源確保に全力を注いできた。○三年六月初め現在、井戸やカレーズ（伝統的な地下水路）の総作業地九八三ヶ所、うち八七三ヶ所で水を得て、多くの村民たちの離村・難民化を防いできた。しかし、飲料水や診療所だけでは生きてゆけない。そこで、大規模な灌漑計画となった。

旱魃は地球温暖化と明らかに関係している。ヒンズークツシュ山脈の万年雪は、夏に解け出して沃野を提供する巨大な貯水槽である。幾千万年もの間、それは無数の生命を支え続けてきた。その雪が、標高四千メートル以下では完全に消えている。冬の積雪が初夏までに流れ去ってしまった。そこで私たちが立てた戦略は、比較的低い山の雪に依存してきた地域には無数の井堰・溜池で貯水し、万年雪が残る五千メートル級以上の山から流れ出す河からは、傍流を引き込むことである。これ以外に生き残る策なしと見て、「灌漑・一五ヶ年計画」が開始された。

その第一弾として始まったのが、現在の用水路建設である。約二億円を投じて、全長一四キロメートルを一年で通水、約二千ヘクタールを潤す。旱魃の実情は凄まじいものがあり、当初の予定灌漑面積を拡大、流量を毎秒三トン、小麦の予想生産高を約二万トン以上に引き上げざるを得なかった。実現すれば、成人一五万人を養うことができる。

水面幅四、五メートル、トンネル二ヶ所、水道橋一ヶ所、取水口には二重の水門をつけて備える。作業工程は、大半を伝統的な技術に頼った。即ち、大半が盛り土、植林、石組み、蛇籠（じやかく）の組み合わせである。岩盤の掘削のみはダイナマイトを使い、水門付近だけコンクリートを使う。

近代的なコンクリート固めの水路は、完成後の見栄えは良いが、地元民が維持できない。実際、数年ごとに壊れ、あちこちに残骸がさらされている。現地に馴染まないのだ。

ところで、医療団体である私たちが何故、水路を手がけるのか。現地の病気の大半が清潔な飲料水の欠乏と、栄養失調を背景にしている。膨大な人々が死に、荒廃した故郷から逃れた人々が難民化した。この事実は「国際社会」に遂に伝わらなかった。しかも、治安の悪化で外国人は誰も地方に行きたがらないからだ。

奥地のクナール州でも、迷惑な米軍の活動と対峙して、診療が継続されている。沖縄平和賞を機に建設中の「沖縄ピース・クリニック」の完成も間近である。

本当は空爆Ⅱ民主化どころの騒ぎではなかったのだ。昨年パキスタンから帰還した難民は、二〇〇万人中一七〇万人と発表されたが、一五〇万人が村での暮しが立たずUターンしたと言われる。この数字が「復興」の実態を雄弁に語っている。

先ず生きることだ。その証拠に、私たちの事業には、おんしゅう恩讐を超えてかつての仇敵同士が協力する。タリバン支持者もいるし、北部同盟軍の元兵士もいる。新政権の役人は機材の貸し出しや安全保障を申し出、「長老会」が背後から私たちを守る。彼らに共通した認識は、荒廃したアフガニスタンは再び忘れ去られ、結局自分たち自身で後始末をせねばならないということである。

折から、現地では外国軍への襲撃が活発化し、日本ではイラク派兵Ⅱ復興支援の決議が国会で行われようとしていた。テロ戦争も復興も、黙々と額に汗する人々には、余りに遠い世界である。

複製・出力・二次利用禁止

(
2
0
0
3
・
6
・
14
)

平和を奪還せよ

「難民帰農」こそ真の復興

みなさん、お元気でしょうか。冬に入った現地では、今PMS（ペシャワール会医療サービス）の事業が最大の山場を迎えました。これまで、再々会報などを通じて報告してきた灌漑用水路の仕事が、正念場に入っているからです。

取水するクナル河は、インダス河の支流にあたり、河川敷の幅一キロメートル以上、とてつもない大河です。ヒンズークツシュ最高峰の連山の雪から溶け出す水は、季節変動が激しく、夏と冬の水位差が三・五メートルを超えます。あと三ヶ月もすると、洪水のような雪解け水が押し寄せます。従って、今冬に取水口部を仕上げないと、工期を一年延ばすことになります。そこで、「この二、三ヶ月が我々の将来を決める」と宣言、六百数十名の作業員による人海戦術だけでな

く、大型掘削機（ユンボ）四台、ダンプカー三台、大型ローダー（ショベルカー）二台、コンクリート・ミキサー五台、トラクター一〇台以上と、これまでにない機械力を投入、取水口から二キロメートルまでの地点に作業員がアリののように殺到、突貫作業が開始されました。

先ず主流を堰き止めて傍流を作り、川底を干して取水口部と水門の工事を行います。初めの二キロメートルは相当な水量、毎秒約八・九トンを引き入れるので、水路兩岸の洗屈が起ころぬよう、万全の護岸工事を行わねばなりません。どの部分が遅れても失敗しますので、チーム分けを適切に行い、無駄なく短期間のうちに終えねばなりません。

小生も現場に張りつけになり、全てに優先、陣頭指揮をとっています。橋本君を初め、農業や水源事業にかかわる日本人青年十数名、一六〇名の現地職員、それをペシャワールのPMS基地病院が全面的に支えています。取水口および最初の三キロメートルだけで、護岸に使う蛇籠じゃかごが三千個以上、六六トンの針金が使用され、これも現場のワークショップが六月以来奮闘して生産を完了しました。五月以来の作業員はのべ五万人を突破、岩盤のダイナマイト爆破回数は一六千回以上、現在一日一〇〇発の爆破が行われています。

文字通りの「総力戦」で、十数万の早魃難民かんぱつが帰農できるか否かの瀬戸際です。地元民もアフガン政府も固唾かたずを呑んで見守っています。

ここで私たちが採用したのは、現地の人々が独力でも維持できる伝統工法です。取水口とトンネルを除けば、全て石と土、植林で水路ができます。護岸のために使用する柳の木は、日本在住

の或るアフガン人が寄付してくれ、約三万本が用意されます。

しかし、この非常時に限って、例によって様々な難関に遭遇いたします。

一月二日には突然米軍ヘリ二機が旋回して機銃掃射を我々に加え、作業地の平和なムードが吹き飛ばされました。取水口のあるクナール州には、現在米軍兵力が続々と集結、不穏な雰囲気です。

前後して北部のガズニ州でフランス人女性が殺害され、これに抗議する国連やNGO（非政府組織）が至る所で活動を停止しました。カンダハル州では日本のJICA（国際協力機構）の道路工事が妨害を受けたと聞きます。私たちの主な活動地であるニングラハル州でも、PMS以外の動きは殆どないようです。

イラク参戦の影響か、対日感情にも陰りが見られます。職員の寝泊りするグラエ・ヌール診療所では、「日本人医療関係者を来させるな」と付近住民が抗議します。クナール州やヌーリスターの職員交代も次第に困難になっています。二年前の空爆下でも、こんなことは考えられなかったのです。

これに心ない愚行が加わります。作業地対岸で行われた外国NGOの工事の影響で水流が変化、激流が川沿いの国道を破壊、私たちの水路の一部に迫っています。これを守る余分な工事も、結局私たちが自身が生冬の間にやらねばならなくなりました。

憤懣^{ふんまん}やるかたない職員一同を叱咤^{しした}し、「議論のための議論は無用。ただ実行あるのみ。この際、

全責任は中村がとる故、限られた期間内で各自の持分を果たすこと」と、全工程の指示を私が出すことにしました。臨戦態勢で張り詰めた空気がみなぎっていますが、みな意気軒昂けんりゆうです。

でも、捨てる神あれば拾う神あり。日本人ワーカーの中には土木に明るい若者、飛び入りで駆けつけた五十代の石橋さんが掘削機械の経験者、農業担当の橋本君がよく皆をまとめ、心強い限りです。また、カーブル政府の「灌漑省かんがい」から「日本人技師を伴って説明せよ」と呼び出しをくらい、それまでジャラバード出張所から無体な要求をされ続けていたので、悪くすれば作業中止命令かと恐れて出頭しました。しかし意外にも「外国人が引き上げるこの時期に、よくぞ」と激賞され、進んで協力を申し出てくださいました。

今、殆どが農民たるアフガン人が欲するのは、食糧と平和な村々の回復です。東部アフガンは未曾有みぞうの旱魃で耕地が砂漠化し、大量の難民が発生しています。彼らが大都市に流れ、治安悪化の背景をなしていることを認めない者はいません。建設中の用水路は十数万人の帰農を促し、少なからず地域の平和に寄与するでしょう。

にもかかわらず、このところ現地では、米軍に対してだけでなく、国連組織や国際赤十字、外国NGOへの襲撃事件が盛んに伝えられています。「アフガン人は恩知らずだ」と言って撤退した国際団体も少なくありません。

しかし、現地側が当惑するのは、そもそも「復興」が「破壊」とセットで行われ、それも外国人の満足が優先するからです。結局、軍事的干渉は取り返しのかね結果を生みました。人々が

生きるための無私の支援なら、どうして武力が必要でしょうか。そのような活動は皆こぞって守ってくれます。私たちは少なくとも地上で、一度も攻撃を受けたことはありません。以前は歓迎された日章旗ですが、「日本政府とは無関係だ」と明言せざるを得ない事情に至りましたが、それでも日本人の誇りというものがあります。

平和とは消極的なものではありません。それは戦争以上に忍耐と努力、強さが要ります。「平和」は、私たちの祖先が血を流して得た結論の筈です。弱い者に拳を振り上げて絶叫するのは、人として卑怯かつ下品な行爲です。ひとつの国が軍隊（自衛隊）を動かすことがどんな重大事なのか、おそらく、この愚かさと同関心は、近い将来、より大きなツケを払うことになるでしょう。「日本は既に米国の一州となった」と言われて是非もなく、尊敬されるどころか、攻撃の対象となるのは時間の問題でしょう。ひしひしと迫る破局の予感の中で、アフガニスタンの現状を見て、「この償いをどうしてくれる」と言いたいのが実感です。

それでも悲憤を抑え、「だからこそ自分たちが此処にいるのだ」と言い聞かせ、砂漠化した大地が緑化する幻を見ては、わが身を励ますこの頃であります。

(2003・12・17)